

入門と題されたテーマは系統的に整理された内容で、新年度の開校にふさわしい講義でした。そしてまた、今までなんとなく受け入れてしまっていた弥生のイメージに見直しを迫るものでもありました。妻木晩田も含め弥生時代に生きていた人たちは、渡来人とか、渡来系弥生人と呼ばれていますが、詳しい定義については、見かけないことに気がきました。

最近の妻木晩田の調査では斜面地にも住居跡が見つかり、尾根の頂上部だけでなく指定地の広く全体に人が住んでいた可能性が分かり、従来考えられていたより大きな集団だったと思われます。また、周辺の樹木は、竪穴住居を建てる際に使われ、伐採を重ねたことによって深く生い茂った森でなくなっていたようです。

弥生のカレンダーを見るとコメ作りの作業に交じって、栗やドングリなどの木の実、キノコ、山菜など山の幸を採集したり、アワビやサザエやアサリなどの貝類を捕まえたり、コイやフナ、或いはマグロやクロダイなどの魚を釣り上げたり、時には罟や狩猟道具でカモなどの水鳥やイノシシ、シカなども捕獲していたことが分かります。これらの食生活や生業は、縄文時代のそれと共通するところがあるように思います。

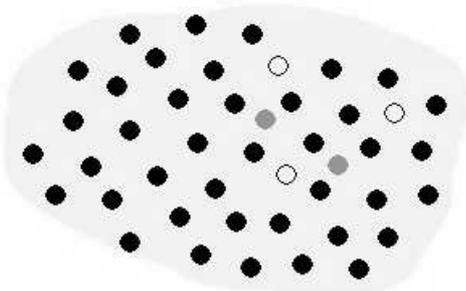


左の絵は弥生時代の米の収穫作業を想像した風景です。講座では“松尾池あたりで水田が耕作されていた可能性があるし、周辺の平地でも水田が開発されていて、妻木晩田の集落を支えていたと考えられる”とのお話でした。大自然の中で暮らす強靱なムラ人たちは、少々の収穫物を担いで坂道を昇り降りすることに、あまり抵抗感はなかったのでしょうか。

稲作導入期の渡来集団の移住は、‘出土品から渡来集団のみで構成された集落とみられる遺跡があること’や、‘出現当初の水田がかなり完成された形であること’などから、実際に

あったと考えられています。また、朝鮮半島南部に多い支石墓が西北九州各地に出現することも、渡来人の存在を物語っているそうです。

しかし、初期農耕をおこなった集落の大半は、‘在来の土器や遺物の出土数の方が圧倒的に多いこと’などから、在来集団(縄文人の子孫)と少数の渡来人が同じ集落に混住していたとされています。縄文人を●に、渡来人を○に、両者の混血を灰色として図にすると、右のような感じでしょうか。しかし、収穫の風景に描かれるムラ人は、ほとんどが渡来系弥生人のように見えます。



狩猟採集民の女たちはわずか6時間の労働で、一家族が3日間食べられるだけの食料を集められるそうです。それに対して、原初的な農耕民は、日々の農作業という重労働に加えて、天候不順や病害による不作に脅かされ、定住による心的ストレスも高いといえます。なぜ、肉体的にも精神的にも豊かな狩猟採集生活を捨て、労働強化とリスクやストレスをとまなう農耕生活を選んだのでしょうか。それは、‘縄文時代後期から晩期にかけて、地球が寒冷化して、狩猟採集で確保できる食料が乏しくなり、中期に膨れあがった人口を支えることができなくなったため’と一般的には推測されています。

何世紀もかけて渡来した集団の数は膨大なものだったと思います。彼らは高い文明と技術を持って渡来しましたが、到達の地にそれらの技術を活用する環境(道具や素材)がなかったため、先住民とあまり変わらない暮らしをせざるを得なかったとすれば、遺跡からの遺物が先住民のそれと変わることがないのは当然かもしれません。しかし、旅立ちの地で米の持つ優位性を体得しているからこそ、渡来系弥生人は子孫繁栄を確保するために、重労働を厭わず灌漑水耕を展開していったとは考えられないでしょうか。西日本の日本海沿岸部の先住民は、縄文時代から続く半島から渡来した人たちの累積であり、

関東・東北の縄文人のDNAはほとんど含まれていなかったのではないのでしょうか。純粋に近い渡来人が西日本で増殖し、文明の高さも相まって勢力を拡大し、後に東方に展開する段階になってから縄文人との混血が増えていったと考えると、妻木ムラのイメージ図も左のように反転します。

朝鮮半島沿岸部からの渡来人のDNAは、「海から登る朝陽」に憧れ、防衛力に優れた畿内を安住の地としながらも、ついには紀伊半島東部に、「海から登る朝陽」の地を見つけ、心の平穏を得ることができたのかもしれません。

